

沈まぬ太陽 (三)

御巢鷹山篇

山崎豊子



新潮社

沈まぬ太陽

(三)

御巢鷹山 篇

山崎豊子

沈しずまぬ太陽たいよう

(三)

御巢鷹山篇おすたかやま

発行——一九九九年七月三〇日

著者——山崎豊子やまざき ともこ

発行者——佐藤隆信

発行所——株式会社新潮社

162 8711 東京都新宿区矢来町七一

電話——編集部(03)三三六六—五四二—

読者係(03)三三六六—五一—

振替——〇〇一四〇—五一八〇八

印刷所——錦明印刷株式会社

製本所——加藤製本株式会社

© Toyoko Yamasaki 1999, Printed in Japan

乱丁・落丁本は、()面倒ですが小社読者係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。
価格はカバーに表示してあります。

ISBN4-10-322816-4 C0093

沈まぬ太陽
(二) 御巢鷹山篇
* 目次

第九章	第八章	第七章	第六章	第五章	第四章	第三章	第二章	第一章
御 霊	怒 り	紫 煙	償 い	鎮 魂	真 相	無 情	暗 雲	レ ー ダ ー
364	319	267	203	184	152	81	29	9

◇目次 (一)、(二)、(四)、(五)◇

沈まぬ太陽 (一) アフリカ篇・上

第一章 アフリカ

第二章 友情

第三章 撃つ

第四章 クレーター

第五章 影

第六章 カラチ

沈まぬ太陽 (二) アフリカ篇・下

第七章 テヘラン

第八章 ナイロビ

第九章 春雷

沈まぬ太陽 (四) 会長室篇・上

第一章 新生

第二章 朝雲

第三章 黒い潮
第四章 曙光
第五章 波紋
第六章 狼煙
第七章 弔鐘

沈まぬ太陽(五) 会長室篇・下

第八章 風

第九章 流星

第十章 射る

第十一章 迷走

第十二章 幾山河

あとがき

主要参考文献

取材協力者リスト

沈
ま
ぬ
太
陽

沈まぬ太陽
(三)

御巢鷹山篇

カバー写真◇岩合光昭
装幀◇新潮社装幀室

第一章 レーダー

所沢の東京航空交通管制部（ＡＣＣ）では、天井の低いプラネタリウムのように暗い空間に、緑や黄、青の灯りが光っている。

部屋の上側には東日本空域をカバーするレーダー画面、左側には西日本空域をカバーするレーダーが、ずらりと並んでいる。

円形の濃いグレーの画面には、現在、航行中の機影を示す輝点とその便名、目的地、高度などが、緑色の数字や符号で表示され、間断なく動いている。

午後六時二十四分四十秒――突然、関東南Ａ空域のレーダー画面に、ＥＭＧ（緊急事態）の赤い文字が点滅し、ビービーと金属音を帯びた警報が鳴った。

緊急事態を発したのは、国民航空（ＮＡＬ）一二三便であった。空域を担当していた二人の管制官は画面を凝視した。この時間帯は「空の銀座通り」と云われるほど、飛行機の交通量が多く、十機以上の輝点が点在しているが、緊急事態を発した国民航空一二三便の輝点は、他機より一際大きく、明るい光を放っていた。

空域には、米軍横田基地を離発着する軍用機が多く、ちょっとしたエンジントラブルでも、エ

マージェンシー・コール（緊急通信）を発信するが、日本の民間機が発することは稀であった。何が起ったのだろうか――、ヘッドセットをつけ、口元にのびた小さなマイクに向って、直接、交信している管制官の耳に、国民航空一二三便の機長の声が飛び込んで来た。

25分20秒

NAL「アー、東京管制部、こちらNAL123便、緊急……トラブル発生、羽田へ戻りたい、22000フィート（約六七〇〇メートル）まで降下する、どうぞ」

管制部「22000フィートまで降下ですね、了解、要求通り承認します」

NAL「大島へのリーダー誘導をお願いします」

管制部「右旋回しますか、それとも左旋回？」

NAL「右旋回に移っています、どうぞ」

管制部「右旋回して、磁方位90度（真東）、大島へリーダー誘導します」

交信はそこで一旦、途切れたが、羽田へ戻りたいというトラブルの内容は、不明であった。補佐として、隣りに座っている管制官は、キーボードを叩き、国民航空一二三便が羽田空港を出発する際に、コンピューターに入力された情報を、プリントアウトした。

型式 ボーイング747SR-1100

目的地 大阪国際空港

乗客乗員 五二四名（うち乗員一五名）

満員のジャンボ・ジェット機であった。乗客の中に急病人が出たのか、エンジンが故障したのか、或いは、ハイジャックでもされたのか。緊急事態を發した操縦室の中は、対応に追われ、多忙を極めているはずである。管制官の方からは、不用意に質問を發せられない。

エマージェンシーを發している画面に次席管制官ほか、手のあいている管制官たちが集つて来た。

大島へのレーダー誘導を要請し、右旋回に移っているという一二三便は、一向、方角を東へ変えず、西へと移動し、高度もさして變つていない。

一、二分の間は、何らかの理由でゆっくり旋回するのだと思つていた管制官たちは、不審に思いはじめた。

27分02秒

管制部「NAL123便、確認しますが、緊急事態ですね」

NAL「その通りです」

管制部「123便、了解、緊急事態の内容を知らせて下さい」

NAL「……（応答なし）」

28分30秒

管制部「NAL123便、磁方位90度で飛行せよ、大島へのレーダー誘導です」

NAL「しかし現在、操縦不能」

緊急事態の内容を知らせる第一報が、いきなり「操縦不能」とは——。ボーイング社のジャンボ機は、エンジンや油圧、電気系統にたとえ大きなトラブルが発生したとしても、二重、三重に安全策が施され、飛び続けることが出来る世界一、安全な旅客機とされている。現に「操縦不

能”と云つて来ながら、二万四、五千フィートの高度を飛行し続けている。管制官たちにとって、未だ経験したことのない出来事だった。

さらに詳しい状況を知りたい気持を抑え、レーダー画面に対している管制官は、他機の安全運航のために全力を挙げた。その間の一二三便の動きは、次席管制官らが見守り、機長からの連絡をひたすら待った。機長の声は、スピーカーのスイッチを入れ、周囲にも聞えるようになっていた。

静岡の焼津付近へ達した国民航空一二三便は、なおも西へ向っている。緊急着陸をするつもりなのか。そうだとすれば距離的には自衛隊の浜松基地に近いが、滑走路がジャンボ機の重さに耐えられないであろうし、現在の高度から、浜松基地に着陸するには近過ぎて、無理がある。

一二三便は高度が一定しなくなり、二万二千から二万五千フィートの間を上下している。もはや羽田へ戻るより、名古屋へ行った方が時間的に早い。

担当管制官は、レーダー画面にますます増えて来た飛行機との交信にかかりきりの状態になっていた。羽田発大分行きの極東国内航空からの呼出しに応じ、すぐその後、徳島発羽田行きの新日本空輸に交通情報を与え、大島通過の報告をして来た米軍輸送機C-1130が、横田基地へ入る許可を求めて来たのに対し、スタンバイをかけ、高度を降下させた。国民航空一二三便の航路を最優先に確保するためであった。

管制部では、念のため羽田の救難調整本部へ連絡を入れていた。

国民航空一二三便はなぜ、近くの名古屋へ向けて降下しないのか。パイロットからの連絡を待ち切れず、再び管制官の方から、交信した。

31分02秒 管制部「NAL123便、降下出来ますか」

NAL「アー……、現在、降下中」

管制部「了解、現在高度は、いくらですか」

NAL「24000フィート」

14秒 管制部「了解、現在位置、名古屋まで72マイル、名古屋へ着陸出来ますか」

NAL「アー……いや、羽田へ戻ります」

管制官たちは、予想外の展開に顔を見合せた。ベテランの次席管制官にして、一二三便が「操縦不能」だと云いながら、この期に及んでなお、羽田へ戻るという意向が解^げせなかった。

31分21秒 管制部「NAL123便、磁方位90度でお願いします」

NAL「……（応答なし）」

管制部「NAL123便、これからは日本語で交信して下さい」

NAL「……（応答なし）」

無線交信は、万国共通、英語で行われているが、パイロットの負担を軽くし、且つ、意思疎通の妨げにならぬように、敢えて日本語での交信を指示したのだった。管制官の呼びかけに応答はないが、機影は僅かに北へ向き、次いで東へ向きを変えつつあるような動きを見せはじめた。操縦不能と訴えつつも、一貫して羽田へ戻ると云い続けているからには、それなりの目算があるのか。それにしても何故、管制部の必死の呼びかけに応答しないのだろう。

管制官たちの不安は、募った。

帝都ホテル「孔雀の間」では、その日の夕刻から、国民航空創立三十五周年の記念パーティが盛大に催されていた。

モーニングに身を包んだ堂本社長や副社長、専務ら八名の役員が、金屏風の前にたつて、各界の来賓たちに深々と頭を下げて、迎えていた。

堂本社長にとっては、社長就任三期目の晴れの日であった。副社長は、運輸省からの天下りで、国民航空生え抜き派の堂本の、次の社長含みで送り込まれている人物であった。

受付では、ダークスーツ姿の堂本の社員たちが、恭しく来賓に應對していた。運輸大臣をはじめ、大蔵、通産、外務、郵政の各大臣、次官、各国の駐日大使、航空会社、金融機関、新聞、テレビなどのトップが、次々と到着し、いつもは無表情な堂本が、高揚を隠しきれない面持であった。

堂本社長は、運輸省が送り込んで来た天下りなどに、社長の座をあげ渡す気などさらさなく、創立三十五周年パーティは、社内外に堂本体制の長期政権をアピールする好機として術を打って来た。金屏風の前で威儀を正しながら、堂本は、腹の底からこみ上げて来る喜びを噛みしめていた。

恩地元は、来賓受付の端にたち、駐日ケニア大使が到着するのを待ち受けていた。本来、恩地のように海外の僻地を巡廻し十年に及んだ者が出る幕ではなかったが、アフリカ駐在時代に親交のあったケニアの観光野生生物省の次官補が、駐日大使として着任して来、是非、恩地をと、名指して来たのだった。

恩地自身は、東京都労働委員会の審問会で証言したことによって、十一年前にナイロビから東